

入選

小柳 詩 (こやなぎ しい) 松木中 2年生

作品名：夏の庭

図 書：夏の庭

生きるということは、死ぬということと紙一重であると思う。生きていく先には必ず死が待っている。私たちはそんな人生を、いつ終わってしまうかわからない人生を、どんな風に生きていくのかを考えることが大事である。

「人生は一度きり」よくこんな言葉を聞く。私は確かにそうだと考える。もし、死んでしまった後に来世があるとしたら、生きていた頃の記憶が残っているまま生まれ変わることはないと思う。生まれたばかりの赤ちゃんが、「私は○○に住んでいたんだよ」と言うわけがない。何にも染められていない真っ白な記憶であるはずだ。もしかしたら来世は人間ではないかもしれない。もしかしたら生まれ変わるなんてことはないのかもしれない。そう考えると、いまを後悔することなく、大切に生きていくことが大事であると強く思う。

また、生きていく上で必要なことは変化である。外的な変化と内面的な変化、どちらかというと私は内面的な変化を重視したい。一度の人生、ずっと同じじゃつまらない。だからこそ、自分自身が今までの自分との違いを見つけることが大切なんだと思う。

この物語では、少年たちの変化、おじいさんの変化、そして少年たちを取り巻く環境の変化。さまざまな変化が描かれている。この、夏休みという長いようで短い期間での周りの大きな変化、そして自分自身の成長が少年たちの将来へと大きく繋がっていくのだと感じた。

木山、山下、河辺。この小学六年生の3人の少年たちの、山下のおばあさんが死んだことによって生まれた「人の死んだところを見てみたい」という好奇心から、ひとり暮らしのおじいさんを観察するようになる。

観察していくうちに、おじいさんはなぜか元気になっていった。はじめは時々コンビニに行って外に出るだけだったのが、徐々に毎日外に出るようになり、八百屋にも魚屋にも行くようになった。それにつられて少年たちも、深くおじいさんと関わるようになっていった。一緒に洗濯物を干したり、庭にコスモスを植えたり、スイカを食べたり。少年たちはきっと、「死ぬところを見る」という目的なんか忘れて、「おじいさんに死んでほしくない」と

いう気持ちへと変化していったと思う。そんなとき、おじいさんが死んだ。少年たちとおじいさんの分の四房のぶどうを準備したまま、眠るように死んでいたのを少年たちが発見したのだ。少年たちは、この時点で本来の目的は達成し、ほんとは興奮するはずだ。でも実際は、もっと生きてほしい、いつものようにいろんな話をしてほしい、悲しい。そんなふうに思っていただろう。

少年たちは、おじいさんからたくさんのこと学んだ。果物を食べる前の準備や洗濯ロープの結び方、そして物事の考え方までも。おじいさんがいなくなっていても、少年たちは「おじいさんだったらなんて言うだろう」と考えるようになっていった。いっしょに過ごしていくうちに、おじいさんはたくさんのものを残していったのである。そして少年たちは、身近な人の突然の死、感じたことのない悲しみ、初めての大人の関わり、友情。たくさんの中を感じ、受け取り、人として成長していくのだと思う。

少年たちにとってこの夏は、大人になんでも絶対忘れない、忘れられない、とても大きな経験をした夏であった。おじいさんは、死んでも、いなくなってしまっても、少年たちと友だちだ。少年たちは「こんなとき、おじいさんだったらなんて言うだろう」なんて思ったりもする。夏休みという短い期間の中で、ここまで少年たちの心に大きなものを与えた。これだけの影響力のある人と出会えて少年たちは幸せだと思う。もしあの好奇心がなかったなら、もし山下のおばあさんが死んでいなかつたら、彼らは出会っていなかつたのである。彼らの出会いは偶然ではない。何か意味するものがあったように感じる。これから別々の道を行く三人の少年たちの胸の中には、いつでも、いつまでもおじいさんはいる。それはとても心強く、自分の自信になるはずだ。私もこんな影響力のある人とめぐり会いたい。